

令和6(2024)年度 病害虫発生予報 第6号

令和6(2024)年9月20日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

高温・寡照で病害が発生しやすくなるので注意しましょう！

予想期間 9月下旬～10月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は少ない(ほ場率：平年比0%、株率：平年比0%)。(－)
・ 向こう1か月の気温は高く(－)、降水量は多く(+)、日照時間は少ない見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 株が軟弱徒長すると発生しやすくなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
・ 予防を主体に、ベルコートフロアブル(RACコードF：M07)等を使用する。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(ほ場率：平年比111%、株率：平年比42%)。(±)
・ 向こう1か月の気温は高い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しにくい気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

3 いちご アブラムシ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い(ほ場率：平年比344%、株率：平年比175%)。(＋)
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は多い見込み。(－)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、発生を確認したらモスピラン顆粒水溶剤(I:4A)等を葉裏にもよくかかるように散布する。

4 果菜類 コナジラミ類(トマト：黄化葉巻病(TYLCV)、黄化病(ToCV)・きゅうり：退緑黄化病(CCYV))

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ トマトの現在のコナジラミ類の発生はやや多く(±～+)、一部のほ場では既に黄化葉巻病の発生が確認されている。(＋)きゅうりの現在の発生量は平年並。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は多い見込み。(－)
- (3) 対 策 ・ ウイルスを媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部(出入り口、側窓、天窗)に0.4mm目合以下のネットを張り、特に出入り口は二重にする。
・ 黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。
・ 発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
・ トマト黄化葉巻病では、耐病性品種であっても感染すると伝染源となる。黄化病等に感染することもあるため、感受性品種と同様に適切な防除を行う。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 ねぎ 黒斑病・葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(ほ場率：平年比103%、株率：平年比41%)。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 発生初期の防除に重点を置く。多湿条件で発生しやすいため、秋雨期や曇雨天が続く場合は発生に注意して防除を行う。
・ 窒素過多は病害が発生しやすいため、適正な肥培管理を実施する。
・ 残さは、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

6 ねぎ シロイチモジヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 掘
- ・現在の発生量は多い。(+)
 - ・向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は多い見込み。(－)
- (3) 対 策
- ・ほ場をこまめに観察し、本種による被害葉(葉が白く透けて垂れ下がる)を探すなど早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
 - ・幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、葉に食入する前の若齢のうちに薬剤防除を行う。
 - ・展着剤を使用し、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

7 野菜類(いちご・なす・キャベツ・レタス等)・花き類・大豆 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 掘
- ・9月第2半旬までのフェロモントラップによる誘殺数は平年並。(±)
 - ・現在の発生量は、いちご、なすおよびきくでは少ない(－)が、大豆では平年並。(±)
 - ・向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は多い(－)見込み。
- (3) 対 策
- ・定期的にほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
 - ・幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

8 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
いちご	炭疽病	やや多	やや多	にら	アザミウマ類	平年並	平年並
きゅうり	うどんこ病	やや少	平年並	きく	アブラムシ類	多	多
	褐斑病	やや多	多		アザミウマ類	多	多
	アザミウマ類	少	やや少	野菜類・花き類	オオタバコガ	やや多	やや多

秋の病害虫防除対策

○水稲 縞葉枯病(媒介昆虫:ヒメトビウンカ)、黄萎病(媒介昆虫:ツマグロヨコバイ)

- ・縞葉枯病や黄萎病が発生したほ場の再生稲(ひこばえ)は、媒介昆虫の増殖源および病原の獲得源になるため、早めに丁寧な耕起を行きましょう。また、媒介昆虫の越冬場所をなくすため、ほ場周辺の除草を徹底しましょう。

○麦類 種子伝染性病害

- ・オオムギ斑葉病や小麦なまぐさ黒穂病、ムギ類黒節病等の防除のため、種子消毒を必ず行いましょう。なお、オオムギ斑葉病は遅まきすると発病が多くなるため、適期には種を行いましょう。

○いちご 炭疽病・萎黄病

- ・症状が出てからの防除は困難であるため、発病株及び感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分しましょう。

○いちご アザミウマ類

- ・10月中旬までに開花が進んでいるほ場では、アザミウマ類の野外からの飛び込みが多くなる傾向にあります。1～3月頃の発生はハウス内の残存個体由来するため、飛び込み終了後の防除によって、翌春までの密度を抑制する効果が期待できます。施設周辺の除草を徹底し、発生初期のうちに薬剤散布を行うなど、適切に防除しましょう。

○なし 黒星病・炭疽病、りんご 斑点落葉病・褐斑病

- ・病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となります。収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行いましょう。防除の際は周辺へ飛散(ドリフト)しないよう十分注意しましょう。落葉は重要な伝染源となるため、ほ場外に持ち出し、適切に処分しましょう。
- ・[ナシ炭疽病薬剤感受性検定結果](#)、[リンゴ褐斑病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中です。

○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・外来害虫である本種の国内における確認報告が相次いでおり、9月現在、42道府県で発生が確認されています。栃木県における発生は確認されていませんが、飛翔による分散や苗類等を介して本県での発生が懸念されます。発生が疑われる場合はお近くの農業振興事務所もしくは農業総合研究センターへ御連絡ください。
- ・[注意喚起チラシ](#)を当センターHPに掲載中です。

○農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。

○同一薬剤の連用を避け、異なるRACコードの薬剤をローテーション散布しましょう。

1か月気象予報（予報期間9月21日から10月20日 9月19日気象庁発表）

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。期間の前半は、この時期としてはかなり高くなる見込みです。秋雨前線や湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は多く、日照時間は少ないでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10	10	80
降水量	20	30	50
日照時間	50	30	20

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（TEL 028-665-1244）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます

